

金剛堂

金剛堂は、圓教寺の開祖性空上人（910–1007）にとって特別に重要な場所である。書写山で修行を始めたころ、性空上人はかつてこの場所にあった普賢院の塔頭に住んでいたと考えられている。普賢院に住んでいたときに、金剛薩埵菩薩（サンスクリット語：ヴァジュラサトヴァ）が性空上人を訪問された。金剛薩埵は、悟りへの揺るぎない願望を象徴し、天台宗では中心となっている仏である。金剛薩埵は伝えられるところによると、金剛界曼荼羅と退蔵界曼荼羅を表す神聖な印相（ムドラ）を性空上人に伝えたとされる。これら二つの曼荼羅は密教の修行の基本である形而上学的領域を表現している。

室町時代（1336 年～1572 年）に、普賢院の茅葺きの仏殿がここに移されて、性空上人との奇跡的な出会いを記念するために金剛薩埵菩薩像が祀られた。建物の内部は、元々その像が安置されていた金色に輝くお堂が中心になっている。像は、現在は食堂の 2 階に展示されている。この像は、1359 年に奈良の東大寺の仏師である康俊によって彫刻された。

1544 年に金剛堂は改装された。当時の屋根は瓦葺で、天井にはさまざまなアジアの宗教的な神聖な事物や生き物が色鮮やかに描写されていた。その中には仏教ではしばしば悟りを表す 2 頭の龍が描かれている。天井の別の箇所には、半分鳥で半分人間の姿をした不死の迦陵頻伽（サンスクリット語：カラヴィンカ）が飛び、崇高な声で仏陀の教えを伝えている。